

標示薬として赤「キャベージ」の應用 ——Union Pharmaceutique, April 1906 の 文献紹介(石津)

薬学雑誌 293 号 768 頁(1906)より

100 年前の薬誌に新 pH 指示薬に関する外国文献紹介があった。pH という語も、水素イオンという語もなく、ただ「標示薬」である。「普通市場に散在せる赤キャベージを細切りし適度の水を加へて 1 時間煮沸し 1 日放置したる後、越幾斯(エキス)に作り乾涸し酒精に溶解したるものにして、酸に対しては赤色を呈し亜爾加里の存在には綠色を呈す」

成分は植物の花や果皮などに広く存在するフラボノイド系色素シアニンアシルグリコシドであろう。アグリコン cyanidin は 1915 年クロロフィルやカロチンなど植物色素の研究でノーベル化学賞を受けた Willstätter によって構

造決定された。まだ眞島利行、朝比奈泰彦両先生がこの研究室へ留学する前でもあるせいかな、見事なほど、本記事には成分の化学的な説明が一切ない。ただ、標示薬として熱に分解しないとか、燈火の下に於いても作業を誤認すること無しとか、あくまでも実用的記事として書いてある。本当にいろいろな試薬が手作りの時代だったのだ。

今は実験によっては試薬どころかキットまである。パソコンの普及ですべてがスピードアップし、成果主義?では半年、1 年ごとの成果を求められる。これでは、じっくりした研究は敬遠され、誰でも簡単にできる(結果の予測できる)小さな研究が選ばれる。頭をゆっくり使うことがない。たぶん、キャベツの千切りをしていた昔の人のほうが実験の腕はよく、思索も深かった気がする。余裕のない我々は、せいぜい夕食の紫キャベツに酸性ドレッシングをかけて昔を偲ぶしかない。

小林 力